

＜大学院修了生による現地での活動＞ 東日本大震災—医療 NGO「AMDA」の活動に参加して—

大学院 国際協力研究科 2011年3月修了生 高岡 邦子（内科医）

筆者は、本格的に AMDA の国際医療協力に参加するために 2008 年 12 月に開業医を辞め、2009 年 4 月に本大学院に入学した。医療のこゝしか知らないのでは国際協力は務まらないと考えたからである。奇しくも、3 月 19 日の大学院修了式当日に AMDA から派遣されて岩手県大槌町に入った。大槌町は、唯一の県立大槌病院と 5 つの民間診療所が津波で流され、町長をはじめ幹部職員の半分が亡くなり、医療崩壊していた町である。

避難所の一つの県立大槌高校の保健室では、大槌病院の医師・看護師・薬剤師たちが一週間家族とも再会できずに懸命な診療を続けていた。我々が到着する 2 日前に電気・水道が復旧していた。すでに重症患者のトリアージ（治療の優先順位決定）や救急搬送は終わっていて、高血圧症・糖尿病などの慢性疾患の薬を津波で流された人々が、毎日 200 人近く救護所を受診していた。当初は、処方されていた薬の情報もなく医薬品も足りず一番苦勞した時期である。

第 3 週に入ると、医薬品も一部を除いては潤沢に供給され、全国

から日本医師会災害医療チーム（JMAT）が続々と到着した。メディア、県職員、個人ボランティアなども次々と訪れ、対応窓口が必要となったため筆者は、聴診器をしまい調整役に徹した。毎日 5 つのミーティングをこなし情報の共有を心がけた。各避難所のニーズを情報収集し、医療支援物資の振り分け、医療チームの役割分担など、ニーズに即した活動は大学院での学びがなければ成し得なかったと考える。また、AMDA 医療チームは診療のみならず、各自がニーズを拾い上げ母子のためのプレイルームの設置、総合ビタミン剤の配布などさまざまなプログラムを実践し、「NGO の柔軟性」を実感することができた 6 週間であった。

